「キャンパス内のカルト問題」を考える②
―キャンパス内カルト勧誘　信教の自由と教育責任―

北海道大学大学院文学研究科
教授　櫻井義秀
（さくらい よしひで）

一、カルト被害の特徴

カルト被害には二つの難しい問題がある。第一に、被害者は被害の実態に対して他の人から理解と共感が得にくいことである。「大変でしたね」と同情される半面、「そんなところへ入ったなんてどうかしているよね」「変わった人だ」と見られることを恐れて、脱会者は自身の経験を他人に語れない。青年期の数年間、人によっては中高年期を含む数十年の人生が語れない。脱会後、働こうにも履歴書に空白やアルバイトの期間だけが続くことになる。

第二に、カルト体験には〔加害・被害〕の関係性が重なっているため、本人は十字架を背負うような人生を歩むことになる。オウム真理教事件では実行犯の青年達は加害者であると同時に、教祖松本智津夫の妄想をふきこまれた被害者でもあった。統一教会において霊感商法や正体を隠した勧誘を長年繰り返した元信者も、元来は被害者だったのである。しかし、自分の手で無辜（むこ）の市民を殺めたり、老後の資金を奪ったりした記憶が鮮明なために、自身の被害者性に気づくことすらできない人が極めて多い。

カルト教団からの脱会やその後のリハビリ期間を含めた支援活動をしてきたのは、数少ない牧師や僧侶たちであり、統一教会による霊感商法被害に取り組んできた弁護士たちは、損害賠償請求訴訟を通じて一般市民の被害回復と元信者達の宗教的人格権の回復に乗り出した。統一教会による正体を隠した勧誘と対象者の不安を煽り畏怖困惑させて入信を迫る教化方法は、信じない自由も含めた内心の自由を侵した不法行為である。そのことを十数年かけた裁判によって判例として確立した。そして、オウム事件以降、心理学者・精神科医・ジャーナリストが、カルトとマインドコントロールの問題に取り組み、カルト問題への認識が進むことになった。

カルト問題の解決や元信者の回復を支援するためには、宗教・法律・福祉の三つの領域で連携し、宗教とカルトの「間」の問題を確認することが重要である。にもかかわらず、ここが最も出遅れている。すなわち、宗教者や宗教研究者はあえて火中の栗を拾おうとしなかった。カウンセリングや回復期の精神的支援には、臨床心理士に加えて、宗教そのものを知り実践している臨床家＝宗教者のアドバイスこそ必要である。

家族がカルトに巻き込まれて苦しんでいる方、そういう方を支援しようと考えておられる方には、日本脱カルト協会編『カルトからの脱会と回復のための手引き』（遠見書房、二〇〇九年）をお勧めしたい。参考文献や相談先の紹介を含め、必要な情報が揃う書籍である。

二、カルトからの回復

近年、グリーフワーク（悲嘆を表し喪に服する象徴的な行為）を伴うカウンセリングが行われるようになってきた。共に悲しんでくれる家族・友人・適当な知人を相談者として確保できない場合に、専門家が寄り添って悲嘆の表明を受け、共に悲しみを分かち合う。このようなプロセスがカルトから回復する時にも必要である。

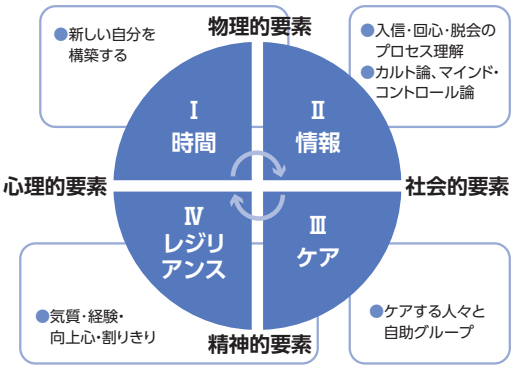
カルトの間違いに気づき、脱会した時点で、カルトにより歪められた自己認識や世界認識をある程度修正したかもしれない。しかし、自分の喪失感に折り合いを付け、勇気をふりしぼって新たなスタートを切るまでの心理的葛藤は長い。人によってはライフワークになる。

個人差があるものの、ショック期↓喪失期↓閉じこもり期を経る心理的プロセスが見られる。ショック期にはカルト内部の完全な人間関係が思い出される。もちろん、カルトの信者たちは疑念や不信があっても完璧な信仰者としてふるまうので、外見上はケアの行き届いた暖かい集団に見える。しかし、カルトから一歩外に出ると、自分から人に関わっていかない限り、自分に関心を示す人には出会えない。そのために、もう一度甘えて依存できる空間が恋しくなるのである。この喪失感を埋めるべく元に戻る人、同じようなカルト団体をはしごする人がいる。戻らないまでも、自分が生きていた時間・人間関係・充実感の喪失にどう折り合いを付けるのか。ここをしっかり悲しんで喪の期間を過ごさないと中途半端な脱会になる。身体は脱会していても、精神的には引きずっている状態である。

カルトから救い出した家族にとっては、早く忘れさせたいとんでもない経験でしかないが、当事者にとっては怒りと悲しみが交互に噴出する思い出である。この不安定期に最後まで寄り添えるのは家族であり、その家族を支援するのがカウンセラーと支援者の役割とも言える。

私は大学の学生相談においてカルト問題への対応も行っているので、家族からの相談を受ける。卒業後も脱会しない学生の親が一年に一度くらいメールや手紙をくれることがある。諦めないこと、戻ってくる場所があることを示し続けてくださいと励ますだけである。そして戻ってきた子の親から十年以上にもわたって挨拶状を受け取ることもある。地獄を見たという思いは巻き込まれた人でなくてはわからないが、共感の姿勢を示すことは経験していなくともできるものである。

最後に、カルトからの回復に必要な四つの要素を示したい。



【Ⅰ時間】 時間とは、当事者にとっての心理的時間であり、長さは人によって異なる。元の自分に戻るための時間ではなく、自己を喪失した喪の期間を経て自分で歩き出し、そして新しい自分を再構築するまでにかかる時間である。

【Ⅱ情報】 情報とは、自分がカルトに巻き込まれたプロセスを理解するために、カルトとは何か、マインドコントロールとはどのようにされるものなのか、について知るための知識である。さまざまな書籍が出ている。

【Ⅲケア】 ケアには、カウンセラーとの話し合いに加えて元信者同士の集会や自助グループの活動が有効である。

【Ⅳレジリアンス】 レジリアンスとは、元来バネの意味であり、近年は精神的な回復力、震災復興する地域力にも使われる。逆境をはね返す内面的な力には、持って生まれた性格に加えて生育上獲得された生活態度、経験によって得られた知恵、自己を律する力などが含まれる。この部分が活性化されないと、時間・情報・ケアが提供されたとしても回復への軌道には乗りにくい。

以上、回復期とケアの問題については、櫻井義秀編『カルトからの回復―こころのレジリアンス』（北海道大学出版会、二〇一五年）を参照していただければ幸いである。

●プロフィール

櫻井 義秀（さくらい・よしひで）

一九六一年生、山形県出身。一九八七年北海道大学大学院文学研究科博士課程中退、二〇〇四年から北海道大学大学院文学研究科教授、現在総長補佐・学生相談室長・特別修学支援室長・ハラスメント相談室長。専門は宗教社会学、タイ・東アジアの宗教文化論、カルト問題研究。著書・編著に『東北タイの開発僧』『タイ上座仏教と社会的包摂』『アジアの社会参加仏教』など多数。